

新渡戸稲造学校ニュースレター 第2号

がんについて気軽に話せる場所があってもいいじゃないか＝がん哲学外来&カフェ

2人に1人ががんにかかり、がんと共に生きる時代です。当たり前の日常生活の中で私たちは「死」を通して生きることの根源的な意味を考える必要に迫られています。しかし、それは孤独な戦いではなく、だれもが通る道のはずです。街の片隅にちょっと一息つける、気軽に相談できる「居場所」があり、「思いを共有し合える人」がいれば、そんな街づくりを目指し、思いをニュースレターに載せて情報を発信していきます。

巻頭言

新渡戸稲造生誕150周年記念事業 一今、地域に求められるもの一

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授 樋野興夫

先日は、今年、最初の定例読書会であった。2007年から始まった読書会は早5年目を迎えた。新渡戸稲造（1862-1933）の『武士道』（1900年）（岩波文庫、矢内原忠雄 訳）は2巡目であり、現在は、内村鑑三（1861-1930）の『代表的日本人』（1908年）（岩波文庫、鈴木範久 訳）と交互に学んでいる。20世紀の初めに、共に英語で書かれているところに、「新渡戸稲造・内村鑑三」のスケールの大きさがうかがい知れよう。「読書会5周年 & 新渡戸稲造生誕150周年」を祝して、記念講演会を企画してはとの話題もあがった。まさに、モットーは「愉快地に、過激に、品性を持って、有益に！」である。

記念すべき第1回「がん哲学外来市民学会」総会は、今年9月、佐久市（勤労者福祉センター）で開催されることが決定された。「がん哲学＝生物学の法則＋人間学の法則＝医師・医療従事者の専門性 vs がん患者の体験＝生きることの根源的な意味を考えようとする人間として対等である＝がん哲学外来」をキャッチフレーズに「農村医学」の発祥の地で、時代の「事前の舵取り」として大胆に企画されることであろう。特別講演、大学生、中高生、一般市民の演題発表も予定されてい

る。前日には「がん哲学外来コーディネーター養成講座」も開講されるようである。まさに、「がん哲学外来市民学会」の時代的要請である。

空き家率50%の筆者の故郷（島根県出雲市出雲大社の鶴峠+鷺浦＝鷺鷺）で、「鷺鷺（うさぎ）medical village」がスタートするようである。日本初の試みとなる。市民、医療者、行政も一体となり、「一人の人間を癒す為には一つの村が要る」の「医療の共同体」の実現である。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」（新渡戸稲造）、「古いものには、まだ再活用される要素があるのである」（内村鑑三）の教訓が今に生きる。今日の「日本国に課せられた使命＝新渡戸稲造&内村鑑三の後世への最大遺物」は、人類の共通のテーマである「医療」を通して具現化されよう。

「最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである」（新渡戸稲造）。「新渡戸稲造学校」の存在の時代的意義は、ここにある。

目次:

巻頭言	1
新渡戸稲造生誕150周年記念事業 一今、地域に求められるもの一	
がん哲学外来とは「第3回新渡戸稲造学校開校予定」	1
がん哲学外来と胆力	2
「がん哲学外来」3周年記念シンポジウムに参加して	2
編集後記	2



樋野興夫先生

がん哲学外来と胆力

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアチーム） 山田圭輔 先生

1)はじめに

私は、金沢大学附属病院に勤務する麻酔科医です。麻酔科業務の中でも、がんの痛み治療を担当しています。

がんの痛みには、身体の痛みだけではなく、こころの痛み（スピリチュアルペイン）があります。身体の痛みに対しては、モルヒネなどの薬物や、神経ブロックや放射線治療などの医学的処置で痛みを減らすことができ、医学の知識と技術を発揮しやすい領域です。一方で、こころの痛みは、薬物や医学的処置では対応できない医学の枠を超えた大きな問題です。

2)こころの痛み（スピリチュアルペイン）

がんの根治が困難と知らされると、多くの人は自己の存在と意味が消滅する苦痛（スピリチュアルペイン）に悩みます。自分はこれまで何をしてきたのか、これからどうすればよいのか、すべてを失ってしまったような絶望的な気持ちになります。

私は、こころの痛みを傾聴することを心がけてきましたが、最後には自分自身も暗くなって共倒れになる無力感に襲われることがしばしばありました。ひとのこころの痛みを和らげるにはどうすればよいのでしょうか。

3)がん哲学外来との出会い

このように迷っている時に、金沢で樋野先生の「がん哲学外来」の講演を聞き、福島県立医大でがん哲学外来を見学する機会に恵まれました。

がん哲学外来では、「暇げな風貌」で苦しみを感じて共感、共鳴し、「偉大なるお節介」として、人生や生と死について語り、最期まで自分らしく生きていく支えとなる言葉、死に行くひとに最後の勇気となる言葉を伝えます。これも口で言うことは簡単ですが、実践するのは容易ではありません。

樋野先生の「がん哲学外来」を見学して最も印象に残ったことは、先生の胆力でした。胆力とは覚悟や決意とも言えるでしょう。先生は、患者さんに「それしかない」との言葉を用いられます。樋野先生ご自身も、できることは暇げな風貌と偉大なるお節介しかないとの胆力を持って実践しておられるようでした。両者の間で、新しい胆力が生まれてくる場所、それががん哲学外来と感じました。

新渡戸稲造先生は、「われ太平洋の架け橋とならん」と決意を語りました。これも胆力です。私も、無力感に襲われてめげている暇などありません。暇げな風貌で、偉大なるお節介を続けるよう胆力を与えられました。



金沢での講演会後の懇親会（2011年6月）
左から山田先生、樋野先生、西村先生

「暇げな風貌」と
「偉大なるお節介」

最期まで自分らしく生きていく支えとなる言葉、死に行くひとに最後の勇気となる言葉を伝えます

「がん哲学外来」3周年記念シンポジウムに参加して

H.T さん

12月10日横浜「がん哲学外来」3周年記念シンポジウムに参加し、がんと共に生きる事、そしてそれを支える者の心の在り方を教えられた時間であったように思います。

「私達の経験する物事がどんなに絶望的でも、その経験への態度が大切である。」

柏木先生は、人生の実力という10項目を挙げ、苦難を乗り越えていくには心の向きが大切であると説かれ、樋野先生は、メディカルカフェの到来という形で人に寄り添う場の大切さを説かれました。

癌患者やそれを支える家族が多くの困難や障害を乗り越えなければならない状態にある時、それらを息長く続けていくためには、ちょっとお茶でもしながら共に考えていきましょうよ。そのくらいに心のハードルを低くして入っていく事が大事だと言われていました。

緩和ケアという心のケアのニーズが高まりつつある今の時代において、お茶を飲みながら、希望を見出す。そんな支えあう出会いの場として、身近にメディカルカフェが今後増えていくと嬉しいなと感じました。



がん哲学外来について考える会
準備会風景

編集後記

2011年の暮れ、私たちは樋野先生に吸い寄せられるように、なんとも不思議な縁で集まりました。お互いのこともよく知らず、共通する思いは「がんについて気軽に話せる場所が、自分の住んでいる地域にあってほしい」ということだけ。このバラバラな人々が準備会にポツポツと集まり、会を重ねていくうちに、ニュースレターや講演会企画が出来上がりました。

新渡戸稲造学校の校風

- ①「暇げな風貌」の中に、「偉大なるお節介」を有する「胆力と気概」の習得
- ②体験を踏まえつつ、空の上から自分を見る視点を持った「当事者研究」の推進
- ③言葉の大切さ、重み、対話のあり方を学ぶ「次世代のがん相談者」の育成

共感していただける方のご参加大歓迎です。お待ちしております。

「がん哲学外来とは」-今、地域に求められるもの- 講演会開催します！

今回は金沢大学看護科学領域環境・地域看護学講座の共催で開催します。今脚光を浴びている「がん哲学外来」とは何か。今がんと向き合っておられる方、ご家族の方、地域の皆さま、また、医療・介護従事者の方、どうぞ、ふるってご参加ください。

日時：2012年2月11日（土） 10:00~11:30

場所：金沢大学医薬保健学域保健学類 講義室

〒920-0942金沢市小立野5-11-80

テーマ：「がん哲学外来とは」-今、地域に求められるもの-（新渡戸稲造生誕150周年記念事業）

講師：樋野興夫先生（順天堂大学医学部 教授）

山田圭輔先生（金沢大学医学部 講師）

申し込み：naganuma@mhs.mp.kanazawa-u.ac.jp（岡本）